

Working Paper No. 02-02

可能性、生命活動と請求力
—センの“開発”の体系的理解のために—

2002年10月

山口大学大学院東アジア研究科

松井 範 惇

連絡: 〒753-8514 山口市吉田 1677-1 山口大学大学院東アジア研究科

TEL/FAX: 083-933-5530, E-mail: npmatsui@yamaguchi-u.ac.jp

本稿は、2002年11月30日—12月1日、上智大学で行われる国際開発学会第13回全国大会での研究発表のために用意されたものである。

©松井範惇、無断で引用、借用をお断りします。

「可能性、生命活動と請求力：A.センの“開発”の体系的理解のために」

松井範惇

ABSTRACT

本稿は、アマーティア・センが提唱してきた、**Capability**:ケイパビリティ、**Functionings**:ファンクショニング、そして **Entitlement**:エンタイトルメント、という3つの概念、分析道具に暫定的ではあるがより適切な日本語を与え、それらの関係性を議論する。そうすることによって、センの理論体系のより深い、体系的な理解を進めることに資する。

日本では、近年になってようやくセンの業績が評価され始めてきている。しかし、“**Capability**(ケイパビリティ)”を「潜在能力」と呼び、“**Functionings**(ファンクショニング)”を「機能」と日本語訳しているのは、センの議論の本質を歪める結果になってしまっている。さらに、貧困と飢餓・飢饉の議論において、“**Entitlements**(エンタイトルメント)”に対して「権原」という日本語が与えられている状況は、センの真の意図を表さない、極めて狭い概念におとしめてしまうことになっている。少なくとも、読者には議論の中心点が、そして論争の問題点がぼけてしまう結果になっている、といわざるを得ない。これらはどれも十分満足すべき言葉の使い方、用語法になっていない。経済発展論、公共選択・集合的選択と社会厚生、厚生経済学での研究を進めてきたセンは、1988年から最近までいたハーバード大学では哲学教授と経済学教授(ラモント・ユニバーシテイ・プロフェッサーとして)を兼ねていたことからわかるように、書き物、話すもの全てにおいて、極めて厳密に、しかも細心の注意を払って言葉を定義し、論理を展開してきた。

センは、'**Well-being**'(豊かであること、暮らしがうまいこと)を追求する。人々が自由に、自分のしたいことが出来、なりたいものになり、行きたいところに行ける、栄養が足りており、自分の住む、関係するコミュニティーで議論に加わり決定に参加する、そして他人の豊かさにも貢献する、そういった活動から自尊心を得る、子供の食事も十分に教育を与えることもできる、そのような状態とそれらを達成する可能性に最大の価値を与える。これは、所得だけでは計れない、消費数量だけでも分からない。伝統的な経済学の「欲望充足(needs fulfillment)」、「効用(utility)」、「満足感(satisfaction)」だけで捉えることも不十分なことは明らかであろう。

これら3つの概念のセンによる定義と関係について論じ、不平等、貧困、飢餓、飢饉という開発における重要な問題へ、これらの概念が如何に使われるかについてふれる。それぞれの概念にまつわるこれまでの誤解や論争などについて考察する。

キーワード:可能性、生命活動、請求力、アマーティア・セン、**Well-Being**

可能力、生命活動と請求力 :
A. センの“開発”の体系的理解のために

山口大学大学院東アジア研究科
松井 範惇

1 . はじめに

「豊かさとは何か」を追求してきたアマーテア・センは、新古典派の主流派経済学における「効用(utility)」と「厚生(welfare)」に基づく経済学を徹底的に批判してきた。人々にとっての真の豊かさとは、お金が沢山あることだろうか(Rich)、それとも物をいっぱい持つことだろうか(Opulence)、あるいは、好きな物を好きなだけ消費することだろうか(Consumption)。資産(Asset)をたくさん残すことだろうか。それとも、人生に諦めてしまっておくと、むしろ欲望や煩悩に惑わされず、少しの成功や喜びにも大きな満足(Satisfaction)を得られること、が豊かさを生み出すのだろうか。

センは、'Well-being'(豊かであること、暮らしぶりがうまくいっていること)を追求する。人々が自由に、自分のしたいことができ、なりたいものになり、行きたいところに行ける、栄養が足りており、自分の住む、関係するコミュニティーで議論に加わり決定に参加する、そして他人の豊かさにも貢献する、そういった活動から自尊心を得る、子供の食事も十分に教育を与えることもできる、そのような状態とそれらを達成する可能性に最大の価値を与える。これは、所得だけでは測れない。消費数量だけでも分からない。伝統的な経済学の「欲望充足(Desire-needs fulfillment)」、「効用(Utility)」、「満足感(Satisfaction)」だけで捉えることが不十分なことは明らかである。

日本では、近年になってようやくセンの業績が(その多面性も含めて)評価され始めてきている。しかしながら、“Capability(ケイパビリティ)”を「潜在能力」と呼び、“Functionings(ファンクショニング)”を「機能」と日本語訳しているのは、センの議論の本質を歪める結果になってしまっている。さらに、貧困と飢餓・飢饉の議論において、“Entitlements(エンタイトルメント)”に対しては「権原」という日本語が与えられている状況は、センの真の意図を表さない、極めて狭い概念におとしめてしまうことになっている。少なくとも、読者には議論の中心点が、そして論争の問題点がぼけてしまう結果になっている、と言わざるを得ない。これらはどれも十分満足すべき言葉の使い方、用語法になっていない。経済発展論、経済学方法論、集合的選択・合理主義的選択理論、社会的公正、資本・投資・成長と分配、食糧・貧困・飢餓・飢饉、性的差別と家族経済学、厚生経済学、そして、倫理学、民主主義の理論など、実に幅の広い分野で研究を進めてきたセンは、1988年から最近までいたハーバード大学では哲学教授と経済学教授(ラモント・ユニバーシティー・プロフェッサーと

して)を兼ねていたことから分かるように、書き物、話すものの全てにおいて、極めて厳密に、しかも細心の注意を払って言葉を選択し、定義し、論理を展開してきた。

本稿は、センが提唱してきた、ケイパビリティー、フアンクショニング、そして、エンタイトルメント、の3つの概念・分析道具に暫定的ではあるがより適切な日本語を与え、それらの関係性を議論する。そうすることによって、センの“開発”に関する理論体系(それに賛同するか反論するかは別として)のより適切な理解を進めるための第一歩としたい。

カタカナ言葉の嫌いな筆者は、“ケイパビリティー”を「可能性」、「フアンクショニング」を「生命活動」、そして、“エンタイトルメント”を「請求力」と、それぞれ日本語付けすることを提唱する。次の節では、これら3つの概念のセンによる定義と関係について論ずる。次の節では、貧困、豊かさ、飢餓・飢饉という開発における重要な問題へ、これらの概念が如何に使われるかについてふれる。その後、それぞれの概念にまつわるこれまでの誤解や論争などについて簡単に考察する。

2. センの定義・概観

「ケイパビリティー (Capability)」がセンによって最初に提唱されたのは、1979年5月22日、スタンフォード大学でのタナー記念講義であった。これは、1980年に論文、“Equality of What?”として公刊されている。1982年の論文集、*Choice, Welfare and Measurement*, にも収められている。

「平等」・「不平等」を論じるに際しては、その基準、すなわち何についての平等・不平等であるかを明らかにしなければならない。所得、消費、資産、効用、保有資源、機会、達成度、自由度、権利などが考えられる。ベンサム以来の効用に基づく現代の古典派および新古典派の経済学では、もっぱら効用のみが採用されてきた。実証研究では所得が最も頻繁に参照されてきた。ロウルズ流の「公正の理論: 差異原則」に基づくならば、「基本的財 (primary goods)」すなわち、所得、富、機会、自己尊厳の社会的基礎などを含むもので測ることになる。ドウオーキンによると、それは「資源」で測られるべきであり、ノズニック流の平等主義に基づくならば、「社会組織のための基本原則として要求されるべき自由の権利の拡大されたセットに対する平等なエンタイトルメント」で判断されるべきであるという。

功利主義、総効用主義、そしてロウルズの正義論による、全ての基準のどれも満足できるものではない、とセンはそれらを退ける。第1に、これらの概念では、人間の基本的な多様性を認めることにならない。「効用」は、財・サービスなどの“モノ”によって何が出来るかを表すが、その測定は、“モノ”から生み出された心理的・精神的反応の結果を表しているにすぎない。人間の多様性、差異を認めるとき、「平等」を達成したいと願う人間の本性とどうかかわるのだろうか。平等が望ましいと考えられるいくつかの側面には、例えば、権利、達成、幸福などがあるだろう。反対に、人々の間で異なるものには、社会的環境、能力や技能、嗜好、そして価値体系がある。後者における違いが前者の全てを均等化することを排除するので、「多様性」と「平等」という2つの概念は正面から衝突すると

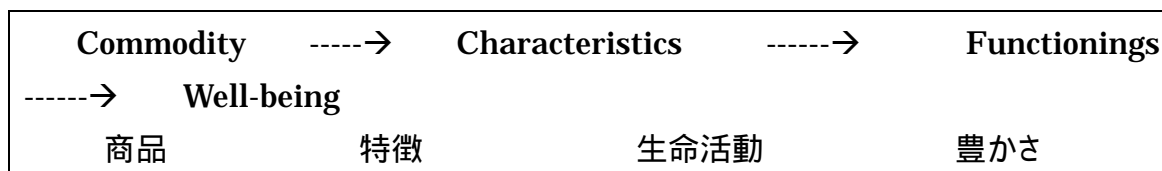
考えられるのである。一例では、異なる技能とそれから導出される報酬の違いは、「平等」な権利という考え方とともに、不平等な物質的基盤に表れる。全てに平等をあてはめることは、多様性に目をつむることになる。

第2に、これらの基準はすべて、結末のみを重んじる結果主義に陥っている。行為や政策などの選択変数を判断するに際して、ものごとの状態を完全にその結果だけに基づいて行い、結果以外の情報を考慮しないという欠陥を持つ。第3に、センのいう厚生主義(Welfarism)の弊害、すなわち、判断基準をそれぞれの状態から生じる関連する個人の効用という情報のみとする、欠点を持つ。これには2つの側面があり、効用という極めて貧しい情報を使うことであり、他方、効用以外の情報を避けるという側面がある。

第4には、新古典派の総効用主義では、状態の価値づけ・判断には、個人的効用の総和のみを問題にするという弱点がある。つまり、誰がいくら失い、誰が得をしたかを問うことなく、合計としての効用が高い状況に、社会的には高い順位づけをする、総和順位づけ方式なのである。

ロウルズの正義論における議論は、「基本的財(Primary goods)」という概念を導入することによって、厚生主義の欠陥を超克してはいる。しかし、効率・平等を判断するのに、「基本的財」に対する個人の支配力のみを用いているので、厚生主義以外の上の非難点を免れてはいない。

センの議論の基本的な枠組みは、次のように示されよう：



まず、ある個人 i の商品ベクトルがあって、その個々の要素は、例えば、自転車、パン、家、本、などがある。それぞれの商品は、さまざまな特徴を持っている。例えば、自転車には、乗ってどこかへ行く、乗らずにカッコ良く見せびらかす、など。パンには、食べて栄養を摂取する、友人・家族との集まりに使うなど。家には、寒さをしのぐ、お客を招く、ものを置く、高価な鬼瓦を誇るなど。本には、新しいことを学ぶ、読むふりをして時間をつぶす、枕として使う、などがある。人が利用し、活用するのは、その人が所有する商品そのものではなく、それらがもたらす特徴なのである。

それら諸特徴の組み合わせを使って、実際に達成する人々の “Doings & Beings” の集合を、センは“ファンクショニング”と呼ぶ。その人がなりたいもの、したいこと、の全ての集まりである。例えば、自転車でサイクリングに行く、食事をする、雨露をしのぐ、外国の事情を知り教養ある人になる、ことなどである。

商品の組み合わせは、個人 i にとって手に入れられる範囲の中から選択することになる。それらは、その人の所得、直面する価格、その他、資産、親・家族、法律、年齢など多くのものに依存する。ある人 i にとって、与えられた経済的、社会的、法律的条件のもとで、手に入れうるこの商品ベク

トルの集合の全体を、センはエンタイトルメントと呼ぶ。働いて得るエンタイトルメント、病気になった時や失業した場合に得る約束としてのエンタイトルメント、親や他人からもらうエンタイトルメント、などさまざまなものがある。資産を単に所有しているだけでなく、その使用权や所有権を移転することによって手に入れるエンタイトルメントもある。すなわち、

$$x_i \quad X_i$$

人は商品ベクトル x_i を特徴 $c(x_i)$ に変換し、それをさらにファンクショニングに転換する関数を $f_i(c(x_i))$ とする。すなわち、

$$f_i \quad F_i,$$

そして、この F_i は現実的に可能な活用関数であって、個人 i が現実的に、なりたい、達成したい、と思うことの集まりである。この F_i の全体像を、 Q_i とし、これを、センは“ケイパビリティ”と呼んでいる。すなわち、

$$F_i \quad Q_i$$

である。こうして、 X_i は伝統的経済学では、消費者理論の予算制約式のようなものに対応するかもしれないが、はるかに広い概念であることが分かる。 F_i はこうしてみると、個人 i の可能力の中の、現実に可能な活用関数、つまり、商品の諸特徴を生命活動に変換する“ファンクショニング”の全ての集まりである。

従って、センのいう“エンタイトルメント” X_i とは、「ある人が必要とする商品・サービスに対する支配力」、つまり、ある(一定の)法律・歴史・社会制度の下で、それぞれの人々に与えられ、認められた権利としての経済(生活)維持のための商品・サービスの入手可能性(金額で表した)のことである。

3 . “エンタイトルメント”は「請求力」

ロバート・ノズICKはその正義論の基礎に、彼のいう「エンタイトルメント」を置く。自由至上主義の立場から主張するノズICKのいうエンタイトルメントとは、全ての人が持つもので、結果がどうであれ、他の諸権利の行使によって決して矮小化されるべきでない基本的な権利のことである。これこそまさに、「権原」という法律用語としての日本語に近い概念を表している。

センの言う“エンタイトルメント”とは、ノズICKのそれとは趣を異にして、商品ベクトルがそこから選択される、全ての可能な集合 X_i のことである。センの“エンタイトルメント”の崩壊は、働く人

の賃金率の急激な下落や、食糧を買わざるをえない人が直面する激しい食糧価格の上昇、伝統的農村社会の分断・マヒ・崩壊などによっても起こりうる。文章状の法律は存在していても、政府が機能マヒ・大混乱に陥って、輸入が完全に停止したり、救援活動の一連の繋がりがどこかで分断されたりすると、“エンタイトルメント”の失敗が起きる。これが、複合的に急激に、特定の地域でおきると、大規模な飢餓が発生し、飢饉になってしまったりする。その時の崩壊する“エンタイトルメント”の種類によって、飢餓・飢饉の犠牲者の地域、職業、階層、年齢層、性別、産業別セクターなどが特定される。飢餓・飢饉に対するエンタイトルメント・アプローチ、つまり、請求力(金額で測った財・サービスへの支配力)の説明力、有効性を論じたのが、センの1981年の著作、*Poverty and Famine*,である。

4 . “ファンクショニング”は「生命活動」

上の定義からも明らかなように、ファンクショニングとは、センはある個人がしたいこと、なりたいもの、それらの全ての集まりであるという。“Doings and Beings”、つまり、行きたいところへ行けること、栄養が十分であること、身体が健やかであること、自分のいるコミュニティーで尊敬されていること、外を恥じることなく歩き回れること、などである。このアプローチの利点の第1は、個人の状態・状況を純粹に商品からのみ見るのではなく、また純粹に心理的・精神的にのみ見るのでもないことである。

第2は、このアプローチでは、人が生を営む上で特定のやり方でうまく生きているかだけでなく、そのようなさまざまな活動・生の側面をやりとげる能力があるかどうかも見ることが出来る。後者に関しては、個人の選択の重要性はむしろ小さく、人間の生きる基本的な権利の側面と見ることもできる。

従って、センのファンクショニングとは、個々の人が生き、命の躍動を発揮する「生命活動」というべきものである。「機能(Function)」とは、物の働き・作用、役割を果たすこと、組織・機関が活動しうる能力、などをあらわし、機械的な意味合いが強い。センのファンクショニングは、器官や組織、機械がいかなる働きをするか・持つかではなく、人々が現実に達成するさまざまなすること、なること、したいこと、なりたいこと、の集まりなのである。筆者は、センのファンクショニングに対しては、機械的な「機能」ではなく、人間的な「生命活動」をあてることが、センの意図にはるかに近いと考える。センは、ファンクショニングで、人々の豊かさをみることを提案しているからである。

5 . “ケイパビリティ”は「可能性」

センは、何故 Potential, Potentiality, Ability という言葉を使わなかったのだろうか？センの言う“ケイパビリティ”とは、人が価値を置く行為を行い、価値を認める状態に到達する能力からみた暮らしや便益なのである。これは、上の第2節でみたように、Fi の総体のことであり、現実に可能な活用関数のすべて、ファンクショニング(生命活動)をそこから選択してくる全体を集めたもので

ある。言いかえると、人がそこから選んで、達成するさまざまなファンクショニング(生命活動)の集合、これを Qi :ケイパビリティー、と呼んでいる。これは、明らかに「潜在能力」という日本語が意味するものとは異なる。

「潜在能力」と「ケイパビリティー」の違いは極めて大きい。まず第1に、前者は、人が持つと考えられるが、顕在化するかどうか、顕在化させられるかどうか、使われるかどうか分からない能力。せいぜい、そういうことは問題にしない、概念なのである。実は、持っているかどうかさえも分からない力、である。後者は、全ての個人が、1人1人が本来備え持っている力・能力であり、その人が生を生きる上で有用であり、生を享受する力なのである。

第2に、前者は人々の間で同じか異なるか、それは分からないが、後者は違って当然とする。同じである必要も理由もない。第3に、前者は身体的・物理的・知的・芸術上などの才能・タレントとして現れるのに対して、後者は人々の生の基本的側面に注目する。その上で、さまざまなものを考える。したがって、第4に、前者はどちらかということという否定的、部分的意味合いがあるのに対し、後者は極めて積極的・前向きな側面があり、そして一人の人間を総体的に捉える。センのいう、“ケイパビリティー”は、人々が、経済的(給料、親など)、政治的(法や制度)、社会的(歴史、宗教、文化、教育など)の与えられた条件の下で、それぞれの個人がそもそも兼ね備えている生きる力なのである。したがって、“ケイパビリティー”は、日本語では「可能性」と呼びたい。センはこれの欠如が貧困をもたらす、貧困そのもの(所得貧困ではなく)であるという。

要するに、センの言うこの“ケイパビリティー・アプローチ”とは、ある人の生活(生きていること)の便益、損得、利点、強みを評価するに際しては、生活の一部として、さまざまな価値ある生命活動(ファンクショニング)を達成・実現するその人の実際の能力で測る、という考え方のことなのである。“ケイパビリティー”を「潜在能力」という日本語をあてることは、(1)静態的意味を与え、(2)そのものが何であるかを認知しない、(3)使われるのかどうか、発揮されるのかどうか、役に立つのかを問わない、(4)発揮されない、使われない能力があるとしたら、それは何故なのか、誰のせいなのか、どのような制約があるのか、を問わない、といった弱点から逃れられない。この意味からも、筆者は「可能性」を提唱する。

6 . 要約と結論

本稿は、“ケイパビリティー”を「可能性」(潜在能力ではなく)、“ファンクショニング”を「生命活動」(機能ではなく)、そして、“エンタイトルメント”を「請求力」(権原ではなく)と、それぞれ呼ぶことを提唱する。センによると、ケイパビリティーの欠如こそが貧困の真の原因(所得貧困はその一部ではない)であるという。ファンクショニングの低下・少なさが、豊かさ(Well-being)を阻害するのである。エンタイトルメントの失敗・崩壊が、飢餓・飢饉の真の原因であり、それらを防ぐような社会(経済、政治)の仕組みを作り、立て直すことが、人々の飢え、大規模・急激な飢饉を起こさせないことにつながるという。

センの開発とは、自由の拡大であり、選択肢の範囲の増大、貧困、不平等、飢餓・飢饉のない社会、あるいは、それらが起きようとするとき、迅速に、有効な対策の講じられる社会である。その中では、人々は最大限の請求力を使い、さまざまな生命活動を楽しみ、元来持っている可能性を、自由に発揮している、そういうプロセスを「開発」という。このような「開発」の過程をイメージするセンの開発経済学の枠組みの中では、もちろん、社会的選択の理論に基づき、「可能性」、「生命活動」、および「請求力」の概念は極めて自然な物として理解されよう。

参考文献

- Dreze & Sen (1989), *Hunger and Public Action*, Clarendon Press: Oxford.
- Dreze, Sen, & Hussain (eds.) (1995), *The Political Economy of Hunger*, Clarendon Press: Oxford.
- Nussbaum & Sen (eds.) (1993), *The Quality of Life*, Clarendon Press: Oxford.
- Nussbaum & Glover (eds.) (1995), *Women, Culture and Development: A Study of Human Capabilities*, Clarendon Press: Oxford.
- Sen (1970), *Collective Choice and Social Welfare*, Holden-Day: San Francisco.
- (1973) (1997), *On Economic Inequality*, Clarendon Press: Oxford.
- (1981), *Poverty and Famines: An Essay on Entitlement and Deprivation*, Clarendon Press: Oxford.
- (1982), *Choice, Welfare and Measurement*, The MIT Press: Cambridge, MA.
- (1984), *Resources, Values and Development*, Harvard University Press: Cambridge, MA.
- (1985), *Commodities and Capabilities*, North-Holland: Amsterdam.
- (1987), *On Ethics and Economics*, Basil Blackwell: Oxford.
- (1987), *The Standard of Living*, Cambridge University Press: Cambridge.
- (1992), *Inequality Reexamined*, Russell Sage foundation: New York, & Clarendon Press: Oxford.
- (1999), *Development as Freedom*, Anchor Books: New York.
- & Dreze (1999), *The Amartya Sen and Jean Dreze Omnibus*, Oxford University Press: New Delhi.
- & Williams (eds.) (1982), *Utilitarianism and Beyond*, Cambridge University Press: Cambridge.

**Tinker (ed.) (1990), *Persisitent Inequalities: Women and World Development*, Oxford University Press:
New York.**

**【連絡先】〒753-8514 山口市吉田 1677-1 山口大学大学院東アジア研究科
TEL/FAX: 083-933-5530 E-mail: npmatsui@yamaguchi-u.ac.jp**